論　文

Dictionary of National Biography とヴィクトリア朝のジェンダー・イデオロギー
──家庭の天使に姿を変えられた Mary Kingsley──

長谷川　雅世

序

ヴィクトリア朝末期、イギリスの知的・文化的財産とも言える辞典が出版された。それが *Dictionary of National Biography* (*DNB*) である。1885 年から 1900 年に刊行されたこの伝記辞典は、2 代目編集者の Sidney Lee 曰く、“all men and women of British or Irish race who have achieved any reasonable measure of distinction in any walk of life” (1900: x) を収録している。初代編集者は Leslie Stephen で、1891 年以降は彼の意思を受け継いだ Lee が後任を務めた。1901 年と 1912 年には Lee のもと、その後は編集者を変えて 1996 年まで増補が行われた。そして、1996 年までの *DNB* は、加筆や修正が施されて新たに *Oxford Dictionary of National Biography* (*ODNB*) として 2004 年に世に出された。この改訂版の企画や出版を契機に、数々の *DNB* や *ODNB* の研究が発表された。

DNB の研究では、この辞典が出版当時の道徳観やイデオロギーを反映しているか否かについて議論されることが多い。そのなかでは批評家たちの意見は二分されるが、多くは *DNB* がヴィクトリア朝の時代精神を反映していると考える。例えば Cannadine は、*DNB* を “[a] great Victorian monument” と呼び、この作品には 19 世紀末の自尊心が集約され、当時の堅固で厳しい道徳観が見られると言う (3)。McCalman は、大英帝国による植民地拡大の時代に作られた *DNB* を “[a] great imperial flagship” に例え、大英帝国の価値観や道徳観への揺るぎない自信を表していると評する (iv)。これに対して少数派ではあるが、Goldman は *DNB* が “a remarkably

unideological and timeless production” (112) であることを証明しようとしている。H. C. G. Matthew も、*DNB* は文化的優越感よりも悲観に彩られ (36)、当時の愛国主義的な調子を避けている (12) と主張することで、この辞典をヴィクトリア朝の大英帝国に対する誇りや優越感の産物とする見方に異議を唱えている。

このように *DNB* がヴィクトリア朝的か否かについて、相反する意見がこれまで提示されてきた。しかし、問題をジェンダーに限定した時、それはヴィクトリア朝的だという意見で一致している。Fenwick は *DNB* を “a monument to Victorian male society” (1994: 24) と称し、この辞典が当時の社会体制と同じ “a male-dominated institution” (ibid. 1) であることを指摘している。*DNB* はヴィクトリア朝の記念碑だという見方に反論している Goldman も、*DNB* による国民生活への女性の貢献の過小評価は “Victorian deficiencies” (121) の 1 つだと言い、ジェンダーに関しては *DNB* が超時代的でないことを認めている。

そして批評家たちが、*DNB* がジェンダーに関してヴィクトリア朝的である根拠として挙げてきたのが、後に詳しく述べる伝記記事の主題人物の男女比や伝記記事の構成という「かたち」だった。別言すれば、個々の伝記記事の文章表現や語られる事柄などの「なかみ」は、ほとんど詳細に考察されてこなかった。そこで本論文は、*DNB* の「なかみ」におけるジェンダー的特徴を具体的に考察する。そのなかで、ヴィクトリア朝のジェンダー・イデオロギーが *DNB* の「なかみ」に如何なる影響を与えているのかを明らかにする。

尚、本論文は考察対象の *DNB* を、ヴィクトリア朝時代の作品である 1901 年の増補巻までに限定する。また、「なかみ」を調べるための分析対象には、Mary Kingsley (1862-1900) の伝記記事を選んだ。というのも、彼女は “Enigmatic and impossible to stereotype” (D. J. Birkett) な女性だからだ。彼女は人生の最初の約 30 年をほぼ家庭内で過ごし、従順な娘としての役割を果たした。しかし、両親が相次いで亡くなると、31 歳で「白人の墓場」と呼ばれていた西アフリカへ単独で旅に出た。その旅で採集した博物学の標本を手に一時帰国したものの、再び西アフリカへ行き、そこで白人男性の同伴なしに食人種として知られていたファン族の村を訪れ、ヨー

ロッパ人未踏のジャングル奥地まで旅をした。これは男性的すぎる冒険だったが、彼女はそれをハイカラーのブラウスにロングのスカートという中流階級の女性らしい服装で行った。この大冒険で有名になった彼女は、帰国後、旅行家、博物学者、そして西アフリカの政治的諸問題の専門家として精力的に執筆や講演を行った。そうして 4 年余りたった時、彼女は南アフリカに渡り、南アフリカ戦争のボーア人捕虜のために看護婦として働き、そこで病に倒れて 37 歳で亡くなった。このように Mary Kingsley は、ヴィクトリア朝のジェンダー・イデオロギーにおける正しい女性と正しくない女性の両方の側面を持つ複雑な人物である。それゆえ、この女性の描き方には *DNB* のジェンダー的特徴が分かりやすく表れていると考え、彼女の伝記を分析対象に選んだ。

1. *DNB* の「かたち」とジェンダー・イデオロギー

DNB の「なかみ」を考察する前に、批評家たちがジェンダーにおいてヴィクトリア朝的であることの根拠としている *DNB* の「かたち」を概観しておきたい。

DNB の改訂版である *ODNB* の女性記事担当編集委員だった Garnett は、*ODNB* 企画の際に特段注意を払うべき事案と考えたのが女性の扱いだったと述べている。なかでも問題だったのが、*DNB* で伝記記事の主題となっている女性の数の少なさで、主題女性の数は全体の 28,201 に対して 998 であり、わずか 3.5% に過ぎなかった (Fenwick 1994: 18)。Lee はその理由を、“the woman’s opportunities of distinction were infinitesimal in the past, and are very small compared with men’s – something like one to thirty – at the present moment” (1896: 273) と説明している。公的領域での活動は伝統的に男性によって行われ、それゆえに公的に傑出した人物を採録する *DNB* には女性が少ないというわけだ。これに対して批評家たちは、極端に女性が少ないのは公的領域からの女性排除の現実を忠実に反映しているからではなく、*DNB* の分離された領域への固執や意識的な女性排除の結果だと指摘する (Baigent 2004: 534; Baigent, Brewer & Larminie 14; Fenwick 1994: 23; Harrison ix; C. Matthew 8-9; Thomas 45-46)。分離された領域信奉の結

果、公的と呼べるはずの女性の活動の多くが私的だと判断され、Colin Matthew が言うように、*DNB* では実際以上にイギリスの権力構造で女性が周縁化されている (10)。

DNB がジェンダー的にヴィクトリア朝の産物だと言われる 2 つ目の理由は、伝記記事の構造と重点にある (Baigent 1997: 360-361; Thomas 45; Tuchman 78-80)。伝記主題が女性の場合、概して、男性の場合よりも、両親や配偶者について多く語られる。さらに、結婚と子供に関する情報は、女性が主題の伝記記事では他の情報と共に年代順に語られるのに対し、男性が主題の場合は記事のほぼ最後に簡短にまとめられることが多い。これらの相違には、女性には家族こそが重要だという考えと、女性は従属的存在であり彼女たちの社会的地位は男性によって決定づけられるという考えが読み取れる。性差による伝記記事の違いは、ヴィクトリア朝時代の女性の領域は家庭であるというジェンダー観と男性中心主義の表れである (Tuchman 78-80)。男性中心主義的傾向は *DNB* の執筆体制そのものにも体現されている。*DNB* の女性執筆者の数は 696 人中 45 人で、その上、彼女たちの約 30% は 1 つの伝記記事しか執筆していない (Fenwick 1994: 6-7)。辞典づくりの組織そのものが男性中心主義的で、女性排除の傾向にあったのだ。

2. *DNB* のなかの Mary Kingsley と George Kingsley

DNB の「かたち」は、この辞典が当時のジェンダー・イデオロギーに囚われていることを物語っている。では、*DNB* の「なかみ」はどうだろうか。これを考察するために、本論文は Lucy Toulmin Smith によって書かれ、1901 年に出された *DNB* の Mary Kingsley 伝を分析するが、その際に他の 2 つの伝記との比較を行う。そうすることで、*DNB* の特徴や傾向がより明確になるはずだからだ。比較対象となる 1 つ目の伝記は、量と同時に質においても女性を公正に扱おうと努めた 2004 年の *ODNB* の伝記記事で、これは *DNB* の伝記記事に D. J. Birkett が大幅な加筆と修正を加えたものである。2 つ目の比較対象は、*DNB* と同じ Smith によって 1900 年に書かれたもので、これは「追悼記事 (“Obituary”)」ではあるが Mary

Kingsley の略伝となっている。

3 つの伝記を比較して明らかになった *DNB* の特徴の 1 つ目は、男性の影響力の強調である。その中心にいるのが父親の George Kingsley だ。*DNB* は 2 人の関係について、“Her father was an enthusiastic traveller with keen scientific interests. These his daughter fully shared. She was fond of natural history, especially of her father’s favourite study of fishes and their ways” と述べ、Mary の趣味趣向が父親によって決定づけられたように語る。これに対して *ODNB* は、父親について “Her father, an enthusiastic traveller, attached himself as private physician to titled families on their world tours, using the opportunity to collect enthnographical information; he was rarely at home” と語り、その後しばらくして、Mary について以下のように述べる。

> Describing herself as a ‘doer of odd jobs’ [⋯], as a young woman she supported her mother in household duties and assisted in her father’s amateur anthropological work, for which she learned German. She was not sent to school, but read omnivorously, and created a world of her own among the travel, natural history, and science books in her father’s library.

Mary が父親の研究助手を務めていたことや彼女が読み漁った書物が父親のものだったという記述は、父親の影響を示唆している。しかし、研究助手は Mary 自身の言葉を使って「雑用」と呼ばれ、その上、それは母親の家事の手伝いと同列に扱われている。さらに、*DNB* では語られない「父親はほとんど家にいなかった」という事実の記述が、Mary が自ら「彼女自身の世界」を創ったことを強調している。*DNB* では父親は Mary に対する直接的で積極的な影響力の持ち主だが、*ODNB* では父親が科学に興味を持つ旅行家だったという環境が娘の趣味趣向に影響を与えたとされ、父親の影響力は間接的になっている。*ODNB* とは違い *DNB* が父親の影響力を強調しようとしていることは、Cambridge への転居についての両者の記述を比較すればよりよく分かる。両者ともこれは Mary に “a great effect” を与えた出来事だと言うが、それは Cambridge での教養人たちとの交際が、彼女の人格や才能を成長させたと考えているからだ。このこと

が、*DNB* では “In the society of cultivated men and women, congenial to her father and herself, she gained confidence in her own powers, winning friends and appreciation for her own sake”、*ODNB* で は、“she made friends among the academic community, including Francis Burkitt and Agnes Smith Lewis, and began to develop her own academic and social skills” と語られる。前者は、Mary に影響を与えた人たちは「父親と気が合った」と説明することで、Cambridge での生活が Mary に与えた「大きな影響」にもが父親が大きく関わっていたと伝えようとしている。対して *ODNB* は、*DNB* の父親への言及を不必要な強調と判断したためか、Mary の友人と父親との関係には一切触れていない。

DNB は Mary の人生における父親の重要性を主張するが、同じく Lucy Toulmin Smith によって書かれた「追悼記事」と比べてみると、それが意識的であることが分かる。「追悼記事」では、Mary の少女時代が次のように語られる。

> [⋯] Mary Kingsley, daughter of Dr. George Kingsley (a naturalist and traveller himself), and niece to Charles and Henry. The blood of a gifted family ran in her veins, and she knew that their spirit stirred in her. Her training was not that of school or college, but that of home lessons and home influence. Books of all kinds, but especially scientific, abounded in the house, piles lay on the chairs and overflowed on to the floor, while the walls were covered with curiosities brought by the traveller from many lands, every one of which had its tale. [⋯] An eager student of natural history, and especially following her father’s favourite study of fishes and their ways, geography and literature were not neglected in her education, and she learned German with pleasure, but not much French. When the father came home for a few months in the year the usual lessons were cast aside, but much quiet reading still went on. The doctor’s brilliant talk had its unconscious influence upon his daughter; while contact with friends of scientific pursuits added to her knowledge. She took up works on ethnography and anthropology, studied philosophy, mathematics, and electricity, and helped her mother in good works. (Smith 1900: 348)

ここで Smith は Mary が熱心に学んだ学問が父親の得意分野だったと

説明し、父親からの影響を指摘している。しかし、*DNB* とは違って「年に数か月」しか父親が家にいなかったという事実が語られ、全体的には、彼女の学問的嗜好は父親本人よりも「家庭の影響」だという印象を与える。Mary の知的成長における父親以外の人々の影響をも語る「追悼記事」は、Smith 自身の言葉を借りれば父親の影響力を「無意識的」なもの、或いは、間接的や部分的なものとして捉えている。それゆえに、Cambridge での Mary の交友関係を語る時、父親に言及していない。両者の違いは、Mary が執筆した父親の伝記の紹介の仕方にも見られる。*DNB* はそれを “a sympathetic memoir of her father” と呼ぶが、「追悼記事」は、父娘の関係が理解し合う良好な関係だったと印象づけるような言葉 “sympathetic” を使わない。同一筆者による 2 つの伝記的記述には相違が見られるが、これは *DNB* による父親の影響力の強調が意図的であることを示唆している。

DNB の描写からは、直接的かつ積極的に娘の知的好奇心を育てようとする父親とそれに応える娘との良好で緊密な親子関係が想像される。だが、それは Mary 自身が語る父娘関係とは異なる。父親の伝記で Mary は自分たちの “similarity in taste” (1900: 198) に何度も言及し、自らの旅行や科学への興味が父親の影響であることを認めている。また、生活範囲が家庭に限定されていた彼女にとって、家庭 / 国内 (home) の外で自由に生きる父親が憧れだったことも容易に想像できる。しかし、家庭を顧みず夫と父親の役目を果たさない彼に、否定的な感情を抱いていたのも事実である。Mary は以下のように、旅に出たきり連絡しない父親が、心配する母親の健康と共に自分たちの自由をも奪ったと語る。

> These anxieties, although groundless, were not good for so high-strung and sensitive a woman as my mother. No amount of experience in her husband’s habit of surviving ever made her feel he was safe, and her mind was kept in one long nervous strain which robbed her of all pleasure in life outside the sphere of her home duty and the companionship of books. The only thing that ever tempted her to go about among her neighbours was to assist them when they were sick in mind, body, or estate. So strongly marked a characteristic was this of our early home life, that to this day I always feel I have no right to associate with people unless there is something the matter

with them. (Kingsley 1900: 203-204)

これは、“how his freedom at home and abroad depended upon and encouraged her and his wife’s confinement” という思いの吐露である (D. Birkett 1992: 18)。Mary の父親の伝記にはこのような感情が表出しているにも拘わらず、*DNB* はそれを “sympathetic” と表現し、父娘関係もそのように形容できるものだったと思わせようとしている。しかし、実際の関係は、“[a] rather ambivalent relation” (Frank 4) だったと言うのが妥当である。

父親は家庭の外で自由でいるために Mary たちの自由を奪っただけではなく、家に帰ってきた時は別の形でそれを奪った。Mary が語るには、“the master of the house” の帰宅によって “any inferior member of the family” は大きな影響を受けた (Kingsley 1900: 197-198)。Mary 自身は、“the sanctuary of his library” の扉が閉ざされて、普段のように自由に読書に耽ることができなくなった (D. Birkett 1989: 17)。George Kingsley は娘の知的好奇心を理解していなかっただけでなく、時にそれを女性に不必要なものだと否定しようとする父親だった (Myre 8-9)。だから、Mary が化学に興味を持ち、独学で身に着けた知識を披露した時の彼の反応は、“[you have] no business to want to be taught such things” (Kingsley 1899: 469) という言葉だった。確かに、晩年の父親は娘に研究を手伝わせたが、Mary はこの時の自らを “his underworker” (Kingsley 1900: 191) と称し、父親の研究の手伝いを母親の家事の手伝いと同じ “odd jobs” (Kingsley 1899: 469) と呼んでいる。これらの言葉からは、研究助手は家族に奉仕するべき娘の義務に過ぎず、少なくとも、父親が娘の知的才能を養うためのものではないと Mary が解していたことが窺える。父親が Mary に大きな影響を与えたことは間違いないが、彼から娘への影響は、*DNB* が示すような積極的で直接的なものではなく、事実は “the truth was I had a great amusing world of my own other people did not know, or care about – that was in the books in my father’s library” (Kingsley 1899: 469) という Mary 自身の言葉に集約されるだろう。

3. *DNB* が語る Mary Kingsley の西アフリカ旅行の動機

Mary の第 2 の人生の始まりとなった西アフリカ旅行の動機に関しても、*DNB* は父親を中心とした男性の存在を重視している。*DNB* は、両親の死後の西アフリカ行きを、Mary は “the hereditary passion for travel” に突き動かされ、“the study, which she had already begun with her father, of early religion and law” を目的に、そして “Her friends, Dr. Guillemard of Cambridge and Dr. Günther of the British Museum encouraged her to collect beetles and freshwater fishes” ために旅に出たと説明する。一方、*ODNB* は旅の動機として同様のものを挙げてはいるが、“a passion for travel” と “a desire to further her anthropological studies” に駆られ、“a collector’s outfit” を準備して旅に出たと述べるだけで、旅への情熱と人類学の研究が父親に由来し、標本採集は男性研究者の勧めだったとは語らない。そして Smith の「追悼記事」では、男性たちへの言及がないだけでなく、“notwithstanding the fears of friends” (349) という言葉で、「白人の墓場」への旅が周囲の反対を押し切っての Mary 独自の決断だったように説明される。

ただし、*DNB* が男性の影響を指摘するのは、Mary の言葉を信じたからかもしれない。Mary の挙げる旅の動機は様々で、その内の 1 つが人類学の調査である。彼女はそれを “I, out of my life in books, found something to do that my father had cared for, something for which I had been taught German, so that I could do for him odd jobs in it. It was the study of early religion and law, and for it, I had to go to West Africa” (Kingsley 1899: 469) と語り、父親の影響を主張している。さらに、ある講演では、西アフリカへ行ったのは、“a desire to complete a great book my father, George Kingsley, had left at his death unfinished” (Macmillan xxii) からだと説明している。標本採集に関しては、著書 *West African Studies* で、“acting under the advice of most eminent men, before whose names European Science trembles, I resolved that the best place to study early religion and law, and collect fishes, was the West Coast of Africa” (4) と言い、男性研究者からの助言の重要性を語っている。ここでは彼らの名前は明かされていないが、*West African Studies* を含む彼女の著述を読めば、それが Günther 博士たちであることは分かる。

Mary 自身が男性の影響力を主張しているが、彼女の挙げる動機は時間と共に変化することや彼女の語りは真意が掴みにくいことなどを考えると、彼女の言葉を素直には受け取り難い。それゆえ、Frank は父親の研究遂行は本当の動機ではなく、Mary は旅の動機を女らしい親への奉仕や自己犠牲とすることで、当時の女性の規範から逸脱した自分の冒険をイギリス社会で許容されるものにしようとしたと考える (58)。また、Mary が父親の文章を編集し出版したのは 2 度目のアフリカ旅行から 4 年以上経過してからで、その上、その間に自分の著書を 2 冊上梓している。このことから、父親の研究完成も真の動機だったか疑わしい。標本採集については、Günther 博士の助言は確固たる根拠があってのことではなく、大英博物館が彼女に具体的援助をしなかったことから、彼女には何も期待していなかったのは明白だと指摘されている (井野瀬 140)。ならば、Günther 博士らの助言が西アフリカ行きを決断した主要因だったとは考え難く、Mary は博物学の標本採集という “a respectable pastime for a middle-class spinster” を動機にすることで自らの旅を正当化しようとしたのであり、標本採集も “a disguise for her wonderfully self-indulgent ‘skylarking’ on the Coast” である (D. Birkett 1992: 25) 可能性がある。さらに、旅行への情熱は、Frank や Wagner が本当の動機と見なしているものだが、彼らの指摘によれば、それは父親から受け継いだものではなく、子供時代に読んだ Richard Burton らのアフリカ体験記によって培われたものである (Frank 57-58; Wagner 2)。

このように旅の動機における男性の存在の重要性は疑わしい。それにも拘わらず、*DNB* の伝記記事はそれを主張している。Mary の言葉を信じたからかもしれないが、「追悼記事」で Smith が男性たちに言及すらしていないことを考えれば、*DNB* による Mary の旅における男性の影響力の強調は意図的なものだった可能性も高い。

4. *DNB* が描く女らしい Mary Kingsley

DNB の Mary 伝には、彼女の女らしさを前景化するという特徴もある。例えば、母親を看病する Mary は、“she devoted herself with her tender

capability to nursing her mother” と描写されている。また、彼女が両親の看病で感じていた重圧は、“The heavy sense of responsibility which had naturally weighed upon Mary Kingsley” と語られている。2 つの描写では “tender” と “naturally” という言葉が使われているが、これらは何らかの意図を持って挿入されたと推測できる。というのも「追悼記事」では、それらのことが “she devoted herself with much ability to nursing the invalid” (348) と “These responsibilities weighed heavily” (348) と語られ、“tender” と “naturally” は使われていないからだ。そして、*DNB* がこれらの言葉を挿入したのは、Mary が「愛情深く」て「女性 (tender sex)」らしい特性を持ち、家族への奉仕を「当然」かつ「自然」に行う従順な女性であったと読者に印象づけるためだったと思われる。このような意図を感じたからこそ、*ODNB* はそれらの言葉を削除し、2 つの文章を “Mary Kingsley devoted herself to nursing her mother” と “The heavy sense of responsibility which had weighed on Mary” に修正したのだろう。さらに *ODNB* は、*DNB* にある 20 代半ばごろの Mary の身体的虚弱さへの言及 “her health, which had been somewhat delicate” も完全に削除している。これは、ヴィクトリア朝社会での女らしさの印の 1 つだった身体的弱さを使って、*DNB* が Mary の女らしさを強調しようとしていると判断したためだろう。

Mary の女らしさを強調する *DNB* は、伝記記事の終盤で彼女の人物像を “Although of daring and masculine courage, loving the sea and outdoor life, Miss Kingsley was full of womanly tenderness, sympathy, and modesty, entirely without false shame” と要約している。この時 *DNB* は、Mary の女らしさを前景化すると同時に、男らしさは彼女の主たる性質ではないと主張している。このような主張をするのは、当時の人々が Mary に男性的なイメージを持っていたためだと考えられる。彼女が男性的だと思われていたことは、彼女をヴィクトリア朝社会の有名人にした 2 度目の西アフリカ旅行の報道のされ方から容易に推測できる。Mary の帰国直後、*Daily Telegraph* は彼女を、“[the] passion […] to emulate the most daring achievements of masculine explorers” を持って “‘manfully’” に冒険した女性で、比類のない New Woman だと紹介している (as cited in Frank 208)。*Travels in West Africa* で Mary 自身が明らかにした数々の勇敢な行動や危険

な体験は、そのイメージを強化したはずだ。確かに、Blunt が言うように、様々な彼女の追悼記事を見てみると、彼女の女性としての美徳を称え、彼女の女らしさを強調しているものが多くあり (135)、それゆえ、女らしさが彼女のイメージの 1 つだったことは否定できない。それでも、女らしさと同時に男らしさについて言及している追悼記事も多くある。例えば、*The Graphic* の “The Late Mary Kingsley” は、以下のように述べている。

> Her love of travel and adventure resembled that of the most daring man, and neither solitude, difficulty, nor danger daunted her in the pursuit of science and natural history. Withal, she was the most modest and simple of women, a charming companion, an agreeable narrator and speaker, and the possessor of a delightful gift of humour. [⋯] With all the go and independence of the New Woman she embodied the sterling qualities of the Old Woman – humility, love of home and family, and a simplicity of nature which was truly refreshing. (886)

Mary の男性的側面や New Woman 的側面を強調する追悼記事も少なくはない。その 1 つである *The Lady* の記事は、南アフリカで捕虜の看病をしながら亡くなった Mary の人生の最後を受けて “she died at last a woman’s death” と言うが、続けて、それによって “she had lived like a man in strange countries where civilization had not gained the mastery” という人々の記憶が変わるわけではないと述べている (as cited in Blunt 137)。Mary と親しい仲にあった Matthew Nathan も、1907 年の回想録で、“while she had a woman’s admiration for strength, she had a man’s sense of justice; she had also a man’s fearlessness” (29) や “In Miss Kingsley both elements[masculine and feminine elements] were present in a high degree, but I am inclined to think that the male element predominated” (30-31) と語っている。

これらのことから、男らしさは Mary に当時付与されていた主たるイメージの 1 つだったことが分かる。しかし、*DNB* はそれを Mary の副次的なものとして背後に追いやるために、彼女の女らしさを強調している。

5. *DNB* が語らない Mary Kingsley の政治活動

DNB の Mary 伝にはさらなる特徴がある。それは彼女の公的領域での活動、特に政治的活動についてほとんど語らないことである。

Mary は 2 度のアフリカ旅行を通して、宣教師や植民地行政官らが伝えるアフリカ観や彼らのアフリカ人との関わり方に強い疑念を抱いた。だから、帰国後、自らが観察したアフリカとアフリカ人の姿、そして大英帝国のキリスト教伝道や西アフリカ統治のあり方について、著書、新聞、雑誌、講演で精力的に発言し、たびたび激しい政治論争を繰り広げ、西アフリカ問題に関する著名人になっていった。

例えば、酒取引の問題では、ヨーロッパでの飲酒批判を西アフリカに適用するべきではないと新聞紙上や講演で訴え、禁酒推進派の宣教師や植民地行政官と対立した。女性であるために公式な政治の場に立つことは許されなかったが、彼女はこの問題の “the centre of the debate” にいて、“an influential and prominent agitator” となった (D. Birkett 1992: 73)。小屋税の時には、財産や公正さについてのアフリカ人の概念を無視して課税する大英帝国の統治の仕方を批判した。彼女の主張は様々な関係者たちの関心を引き、当時の植民地相の Joseph Chamberlain も助言を求めて接触してきた (ibid. 114-116)。著書 *West African Studies* では、現地をよりよく知る商人たちに西アフリカの管理統制を委ね、アフリカ側の意見も取り入れるという西アフリカ統治の「代替案」を提示した。

このように 2 度目のアフリカ旅行からの帰国以降、Mary は旅行家や博物学者としてだけでなく、政治問題の論客としても活躍した。しかし、*DNB* はこの時期のイギリス国内での活動、特に Mary の政治的活動について、短くかつ漠然としか語らない。例えば、*ODNB* とは違い *DNB* は、Mary が政治論争の渦中にいた酒取引と小屋税の問題には一切触れない。旅行記と呼ぶには政治的すぎる *West African Studies* についても、“containing some matter already published and essays showing her matured views on several important subjects” と紹介するにとどまり、「幾つかの重要な問題」の具体的な説明も、*ODNB* では重視されている「代替案」への言及もない。そして *DNB* が Mary の政治的活動に口を閉ざすのは、それがとりわ

け男性的な公的領域での活動、言い換えれば、女らしさとは相容れない活動だと考えたからだろう。だから、*DNB* は Mary の活動を詳しく語らない上に、それらは “charitable purposes” のためであり “justice should be done to native and white man alike” という思いからだったと述べて、Mary の公的領域での活動を、女性の領域である家庭外の活動でありながら女性が世評を損なわずに行うことのできた宣教や慈善活動と同種のものに見せようとしている。

6. *DNB* の方針と家庭の天使姿の Mary Kingsley

DNB の Mary 伝には、男性の影響力の強調、女らしさの前景化、公的活動への沈黙という 3 つの特徴が見られる。そしてこれらの特徴は、Mary の自立性をなくし、彼女の男性的側面や New Woman 的側面を覆い隠す役割を果たしている。結果、*DNB* が描き出す Mary は男性に従属的で女らしい美徳を発揮した女性、つまり、ヴィクトリア朝社会が理想とした家庭の天使のような女性になっている。この Mary 像は、相反する様々な側面を併せ持っていた複雑な Mary Kingsley の全貌を描き出すのに失敗している。しかし問題はそれだけではなく、*DNB* の Mary 伝は、3 つの点で辞典全体が目指したものに反している。

1 つ目は情報の扱い方と提示の仕方についてである。*DNB* の “a manifesto of editorial principles and policies” (Fenwick 1990: 182) と呼べる *Athenaeum* に掲載された記事のなかで、Leslie Stephen は伝記記事の寄稿者を募ると同時に、彼らに向けて次のように述べている。

> We should aim at giving the greatest possible amount of information in a thoroughly business-like from. Dates and facts should be given abundantly and precisely; it is of primary importance to give in all cases, and upon a uniform plan, a clear reference to the primary authorities. (Stephen 1882: 850)

2 代目編集者の Sidney Lee も 1901 年の増補巻の “Prefatory Note” で、

“The principle of the Dictionary requires that the memoirs should be mainly confined to a record of fact, should preserve a strictly judicial tone, and should eschew sentiment” (1901: vi) と語っている。これらの言葉から分かるように、編集者たちは、伝記記事が多くの正確な情報の冷静かつ公正な積み重ねになることを求めた。同時に、Stephen の弟子の一人だった Alfred Ainger によると、*DNB* には “no flowers, by request” が原則としてあり (Maitland 59)、伝記が主題者を賛美する追悼記事になることは禁忌だった。

しかし、Mary Kingsley の伝記記事は、*DNB* が要求した前者よりもそれが禁じた後者に近い。これまで指摘してきたように、Mary 伝は彼女への男性たちの影響を強調し、彼女の公的活動に沈黙している。これらは、正確な情報の提示や公正な事実の積み重ねとは呼び難い。むしろ、ヴィクトリア朝社会の正しい女性の規範に合った Mary 像を創り出しているこの伝記は、故人を礼賛する追悼記事、この場合は故人が女性であるので女らしさを称えることで礼賛する追悼記事のようである。執筆者 Smith は Mary の親の代からの友人で母親のような存在であり、この伝記は Mary 逝去のすぐ後に執筆されている。その上、Mary 自身が生前、自立した女や男らしい女と呼ばれることを嫌い、自分の女性性を守るのに苦心していた。例えば、彼女は著書のなかで西アフリカ旅行の服装が中流階級の女性らしいハイカラーのブラウス、厚手のロングスカート、フォーマルな帽子に日傘だったと何度も語るが、これは男性的な冒険談のために女らしくないと思われることを回避するためだった (Harper 195)。同じ理由から、New Woman らしくズボンをはいていたのかと聞かれた時、“On the contrary, I am very domesticated, and I certainly never adopted any costume other than the ordinary skirt and blouse during my tramps” (von Zedlitz 432) と答えている。Smith が友人の名誉を守りたいと強く思い、同時に故人の思いを尊重しようとしたために、伝記記事が故人の女性としての美徳を称える追悼記事のようになったのかもしれない。興味深いことに、*DNB* の Mary は、Smith が書いた本当の「追悼記事」の彼女以上に家庭の天使的である。これは Smith が、*DNB* の歴史的意義を意識して、自らの伝記記事が後世の人々に与える Mary のイメージを重視したためではないだろうか。

2 つ目の問題は道徳的判断についてである。Lee は、Stephen と *DNB*

を振り返りながら *Principles of Biography* で、伝記の目的は “the moral edification which may flow from the survey of either vice or virtue” ではなく “the truthful transmission of personality” だと言う (1911: 25-26)。さらに、*DNB* の意義と価値について述べている “National Biography” では、国民伝記作家の役割は “all the facts that effectually distinguish one man’s characteristics and exploits from those of his neighbour” を伝えることで、それゆえに伝記主題人物の “the everyday domestic virtues” ではなく、“any departure from the normal development [of devotional sentiment or domestic virtue]” をこそ語るべきだと言っている (1896: 266-267)。伝記記事は徳育を目指すべきではないし、伝記作家は語るべき事実の取捨選択を道徳的基準ではなく、それが特異であるか、或いは、それが主題人物の特異性を伝えるのかという基準で行うべきなのだ。

これに対して Mary 伝は、彼女の女性らしさ、言い換えれば、世間一般の女性にも見られる彼女の美徳を前景化している。その一方で、家庭の天使とは相いれない彼女の性質や行為、つまり、彼女と他の多くの女性たちとの間に一線を画す彼女の特異な側面を覆い隠そうとしている。この伝記記事は、ヴィクトリア朝のジェンダー・イデオロギーに基づいた判断、女性の正しいあり方と正しくないあり方という道徳的とも呼べる判断の下で書かれていると言わざるをえない。その上、Mary が従順な家庭の天使であったことを良いとしているこの伝記は、それを女性のあるべき姿として謳っていると言える。*DNB* の Mary 伝は、道徳的判断に関する *DNB* 全体の方針にも反しているのだ。

3 つ目の問題点は、分離された領域についてである。すでに述べたように *DNB* の「かたち」は、この辞典が分離された領域を信奉していることを具現化していた。*DNB* では分離された領域が遵守され、女性の領域は私的領域であるという理由から、“nursing” や “voluntary work” や “charity” を始めとする様々な女性の活動が私的なものに分類され、公的領域で傑出した人物たちを採録する *DNB* から多くの女性が排除された (Harrison ix)。この伝記辞典において、最も採録するに値しない存在が家庭の天使だったことは容易に分かる。さらに、私的領域と公的領域の分離の方針は個々の伝記記事にも影響を与え、私的な事柄は記事からできる限り排除され、語

られる場合は、それは公的な事柄と分けて語られたり、公的な事柄に従属するものとして扱われたりしている (Baigent 2004: 534; Baigent, Brewer & Larminie 14-15)。

だが、Mary 伝が強調するのは、*DNB* が最も排除しようとした家庭の天使としての Mary の姿である。また、彼女の政治的活動という公的活動は、*DNB* が私的なものとして分類した慈善活動に重ね合されている。それだけでなく、彼女の伝記記事では、家族や家族との関係という私的領域での事柄が多く語られ、それが公的領域での事柄と同等、或いは、それ以上に重要視されている。Mary 伝は分離された領域に関しても、*DNB* の方針から逸脱している。

7. *DNB* の二重基準

Mary Kingsley の伝記記事は *DNB* 全体の方針に反しているが、それにも拘わらず *DNB* に収録された。これが可能となった理由の 1 つは、Mary 伝が非レギュラー寄稿者によって書かれた親しい故人についての伝記だからだと考えられる。

DNB の編集者たちは主題人物や執筆者の選定という *DNB* の「かたち」だけでなく、個々の伝記記事の「なかみ」にも介入した。編集者の Stephen と Lee は寄稿者らと緊密に連絡を取り合い伝記の修正を行ったが、彼らの裁量で文章が書き直されたり削除されたり、新たな情報がつけ加えられたりすることもあった。場合によっては、記事の全てが編集スタッフによって書き直された (Fenwick 1989: xix-xx)。

ただし、検閲の厳しさは、非レギュラー寄稿者の伝記記事にまで徹底されていたわけではなかったようだ。Lee によると、*DNB* 全体の約 3/4 を書いたのは編集スタッフを含む “one hundred regular and voluminous contributors” だった (1900: xv, xvii)。残りの 1/4 を書いた寄稿者の数は約 500 人で、彼らの大半が 10 本以下の伝記、約半分が 1 本の伝記しか書いておらず、その上彼らの伝記の主題者は往々にして近親者だった (Fenwick 1989: xxiii-xxiv)。*DNB* の女性執筆者のほとんどはこのような非レギュラー寄稿者で、Mary 伝の執筆者 Smith はその 1 人である。そして編集者

たちは、このような非レギュラー寄稿者による近親者の伝記が故人を称賛する追悼記事になりやすいことを認識していたはずだ。だから Lee は、“private affection” が執筆者から客観性を奪い (1911: 16)、身内によって書かれた伝記が自分たちの目指す “a record of fact” にならない危険が大いにあると述べている (1901: vii-viii)。しかし、その一方で彼は、*DNB* に実際に寄稿された近親者による伝記のほとんどが “the dispassionate aims which the Dictionary exists to pursue” に達していると主張している (ibid. viii)。だが、以下の *DNB* 出版当時の読者からの批判を見てみると、Lee の主張は真実だと思われない。

> In seeking writers to recount the actions of persons recently deceased, [Mr. Lee] has naturally turned by preference to their near relations who have from personal knowledge access to a source of information closed against others. On the other hand, such writers cannot be impartial, and more than one instance might be given from the volumes now under consideration, in which a relative or connexion decides in favour of the subject of the biography, in matters which are, to say the least, open to doubt. A note pointing out that the writer was the son or brother, as the case might be, of the personage whose actions and character he defends, would put the reader on his guard, but it is hardly a course which an editor can well be expected to take, if he expects to retain the services of such contributors. (“Reviews of Books” 806).

また、情報源の詳細な一覧を伝記につけることが “an indispensable condition” (Lee 1900: viii) だったのだが、近親者や友人による伝記の多くでは、それが “private information” や “personal knowledge” になっている。このことからも、そのような伝記が *DNB* の求めたものと異なっていることが分かる。非レギュラー寄稿者の多くが書いた近親者についての伝記に対しては、*DNB* 編集者の検閲は甘かったと言える。

このような編集者側の検閲の厳しさの程度の違いが、Mary 伝の *DNB* の方針からの逸脱、特に情報の扱い方と提示の仕方における逸脱が問題視されなかった理由として考えられる。ただし、道徳的判断と分離された領域に関しては、それだけが理由ではなく、むしろ *DNB* の性差による二重基

準が理由であると思われる。

伝記記事は徳育を目的とすべきではなく、道徳的判断を記述する事実の取捨選択の指針にすべきではないという *DNB* の方針は、伝記記事の主題者が男性の場合の方針であった。Baigent, Brewer & Larminie が指摘するように、*DNB* では男性が伝記主題者の場合、彼らの道徳性が批評されることは基本的にはあまりなく、彼らの人生における事実に彼らの人生を語らせるという態度が取られているのに対し、女性が主題者の場合は往々にしてそうではない (15-16)。女性が主題者の伝記には、彼女たちの道徳性への意見、特に彼女たちの女らしさを伝えようとする記述が挿入される傾向がある (ibid. 15-16)。そして彼女たちは、男性たちのように “both talented and bad” であることは許されず、概して、基本的に善良である (ibid. 15)。

私的領域と公的領域の分離に関しても、しばしば指摘されるように、*DNB* には性差による二重基準が見られる。本論文で *DNB* の「かたち」について概観した際に述べたように、結婚と子供に関する情報は往々にして、女性が主題人物の場合は他の情報と共に年代順に語られるのに対し、男性の場合は記事のほぼ最後に簡短にまとめられる。さらに、女性主題者の伝記は男性主題者の伝記よりも、両親や配偶者や子供といった私的領域の事柄について多く語る傾向にある。男性の伝記では私的生活と公的生活が分離されていて、後者に重点が置かれているのに対し、女性の伝記ではそうではないのだ (Baigent 1997: 361)。

このように *DNB* の道徳的判断の回避と分離された領域の遵守には性差による二重基準があり、*DNB* 全体の方針は伝記主題者が男性である場合に守られるべきものだった。だとすれば、Mary Kingsley 伝が *DNB* の方針から逸脱していることも不思議ではない。

結　論

本論は、Mary Kingsley の伝記を分析し *DNB* の「なかみ」を考察した。この伝記記事には男性の影響力の強調、女らしさの前景化、公的活動への沈黙という特徴があり、それは家庭の天使の姿をした Mary Kingsley 像

を創り上げていた。さらに Mary 伝は、情報の扱い方と提示の仕方、道徳的判断、分離された領域に関して *DNB* 全体の方針に反していたが、これは *DNB* には二重基準、特に性差による二重基準があることを示していた。このような Mary Kingsley の伝記記事は、複雑で不可解な Mary の人物像を読者に伝えることには失敗しているが、*DNB* が「なかみ」においてもヴィクトリア朝のジェンダー・イデオロギーの影響を受けていたことの良い例証となっている。

注

1. 本論文の一部は京都府立大学英文学会第 5 回大会 (2013 年 10 月 6 日、於：京都府立大学) で口頭発表したものである。
2. 本論文は、科学研究費補助金若手研究 (B)、「『イギリス国民伝記辞典』にみられるジェンダー・イデオロギーとその背景」(課題番号 25770106) の成果の一部である。

引用文献

Baigent, Elizabeth. “The Geography of Biography, the Biography of Geography: Rewriting the *Dictionary of National Biography*.” *Journal of Historical Geography 30* (2004): 531-551.

——— “The *New Dictionary of National Biography*: Revising a Well Loved National Institution.” *Genealogists’ Magazine: Journal of the Society of Genealogists 25.9* (1997): 358-361.

Baigent, Elizabeth, Charlotte Brewer & Vivienne Larminie. “Gender in the Archive: Women in the *Oxford Dictionary of National Biography* and the *Oxford English Dictionary*.” *Archives 30.113* (2005): 13-35.

Birkett, Dea. *Mary Kingsley: Imperial Adventuress*. London: Macmillan, 1992.

——— *Spinsters Abroad: Victorian Lady Explorers*. Oxford: Basil Blackwell, 1989.

Birkett, D. J. “Kingsley, Mary Henrietta (1862–1900).” *Oxford Dictionary of National Biography*. Oxford UP, 2004; Online Ed., Jan. 2008. Web. 2 Oct 2013.

Blunt, Alison. *Travel, Gender and Imperialism: Mary Kingsley and West Africa*. New York: Guilford Press, 1994.

Cannadine, David. “British Worthies.” *London Review of Books 3* (1981): 3-6.

Fenwick, Gillian. “The *Athenaeum* and the *Dictionary of National Biography* 1885-1901.” *Victorian Periodicals Review 23. 4* (1990): 180-88.

——— *The Contributors’ Index to the* Dictionary of National Biography *1885-1901*.

Winchester: St Paul's Bibliographies, 1989.

——— *Women and the* Dictionary of National Biography*: A Guide to* DNB *Volumes 1885-1985 and* Missing Persons. Aldershot: Scolar Press, 1994.

Frank, Katherine. *A Voyager Out: The Life of Mary Kingsley*. Boston: Houghton Mifflin Company, 1986.

Garnett, Jane. "Women and Gender in the *New DNB*." *New Dictionary of National Biography Newsletter* 1. Oxford UP, 1995. Web. 1 Sep. 2013.

Goldman, Lawrence. "A Monument to the Victorian Age? Continuity and Discontiuity in the Dictionaries of National Biography 1882-2004." *Journal of Victorian Culture 11.1* (2006): 111-132.

Harper, Lila Marz. *Solitary Travelers: Nineteenth-Century Women's Travel Narratives and the Scientific Vocation*. London: Associated University Presses, 2001.

Harrison, Brian. "Introduction." *Oxford Dictionary of National Biography, Vol. 1*. Ed. H. C. G. Matthew & Brian Harrison. Oxford: Oxford UP, 2004. v-xix.

井野瀬 久美惠 .『植民地経験のゆくえ―アリス・グリーンのサロンと世紀転換期の大英帝国』. 人文書院 , 2004.

Kingsley, Mary. "In the Days of My Youth: Chapters of Autobiography." *Mainly about People*. 20 May 1899: 468-469.

——— "Memoir." *Notes on Sport and Travel by George Henry Kingsley, with a Memoir by His Daughter Mary H. Kingsley*. London: Macmillan, 1900. 1-206.

——— *Travels in West Africa: With a New Introduction by Anthony Brandt.* 1897; Washington, D. C.: National Geographic, 2002.

——— *West African Studies, 3rd ed.: With a New Introduction by John E. Flint.* 1900; London: Frank Cass, 1964.

"The Late Mary Kingsley." *The Graphic.* 16 Jun. 1900: 886.

Lee, Sidney. "The *Dictionary of National Biography*: A Statistical Account." *Dictionary of National Biography, Vol.63: Wordsworth – Zuylestein*. Ed. Sidney Lee. London: Smith, Elder & Co, 1900. v-xix.

——— "National Biography." *Cornhill Magazine, New Series 26* (1896): 258-277.

——— "Prefatory Note." *Dictionary of National Biography, Supplement, Vol.1.* Ed. Sidney Lee. London: Smith, Elder & Co, 1901. v-viii.

——— *Principles of Biography: The Leslie Stephen Lecture Delivered in the Senate House, Cambridge on 13 May 1911*. Cambridge: Cambridge UP, 1911.

Macmillan, George A. "Introductory Notice to Second Edition." *West African Studies, 3rd ed.: With a New Introduction by John E. Flint*. 1900; London: Frank Cass, 1964. xv-xxvi.

Maitland, Frederic William. *The Life and Letters of Leslie Stephen*. London: Duckworth & Co., 1906.

Matthew, Colin. “Dictionaries of National Biography.” *National Biographies and National Identity: A Critical Approach to Theory and Editorial Practice*. Ed. Iain McCalman, Jodi Parvey & Misty Cook. Canberra: Humanities Research Centre, Australian National University, 1996. 1-18.

Matthew, H. C. G. *Leslie Stephen and the* New Dictionary of National Biography*: Leslie Stephen Lecture Delivered 25 October 1995*. Cambridge: Cambridge UP, 1997.

McCalman, Ian. “Introduction.” *National Biographies and National Identity: A Critical Approach to Theory and Editorial Practice*. Ed. Ian McCalman. Canberra: Australian National UP, 1996. i-x.

Myre, Valerie Grosvenor. *A Victorian Lady in Africa: The Story of Mary Kingsley*. Southhampton: Ashford Press, 1989.

Nathan, Matthew. “Some Reminiscences of Miss Mary Kingsley.” *Journal of the Royal African Society 7.25* (1907): 28-31.

“Reviews of Books: *The Dictionary of National Biography*. Edited by Leslie Stephen and Sidney Lee. Vols. XXIII-XXVIII. (London: Smith and Elder. 1890-1891.).” *The English Historical Review 6.24* (1891): 805-806.

Smith, Lucy Toulmin. “Kingsley, Mary Henrietta (1862–1900).” *Dictionary of National Biography*. Oxford UP, 1901. Web. 2 Oct. 2013.

——— “Obituary: Mary Henrietta Kingsley Born 1862, Died 1900.” *Folklore 11.3* (1900): 348-350.

Stephen, Leslie. “A New ‘Biographia Britannica.’” *Athenaeum.* 23 Dec. 1882: 850.

Thomas, Keith. *Changing Conceptions of National Biography: The* Oxford DNB *in Historical Perspective, the Leslie Stephen Special Lecture, 2004*. Cambridge: Cambridge UP, 2005.

Tuchman, Gaye. “Fame and Misfortune: Edging Women Out of the Great Literary Tradition.” *American Journal of Sociology 90.1* (1984): 72-96.

Von Zedlitz, Baroness. “Chats with Well Known Women: An Interview with Miss Mary Kingsley.” *Woman’s Life*. Feb. 1896: 431-432.

Wagner, Heather Lehr. *Mary Kingsley: Explorer of the Congo*. Philadelphia: Chelsea House, 2004.

要　旨

The *Dictionary of National Biography* and Victorian Gender Ideology: Mary Kingsley Transformed into an Angel in the House

Masayo Hasegawa

Previous studies on the *Dictionary of National Biography* (*DNB*) have mainly focused on its structural features to show that the *DNB* is influenced by Victorian gender ideology. Little research has been conducted on how the content of the dictionary reflects the ideology, which this study aims to correct. In order to reveal the gendered features of its content, this essay analyses the article on Mary Kingsley.

This essay makes a comparative analysis in which the *DNB* article on Mary is contrasted with two other biographical articles on her. It finds that the former emphasises men's influence upon her, foregrounds her femininity, and is silent on her activities in the masculine public sphere. In this way the *DNB* depicts her as an 'angel in the house.' This simplified Mary fails to fully represent the woman described as 'enigmatic and impossible to stereotype.'

The representation of Mary as a feminine woman results from the article trying to keep her masculine aspects untold while overstating her feminine aspects especially in her private life. Moreover, it shows clear signs of bias towards viewing the right sort of woman as the 'angel in the house.' The *DNB* article on Mary is, therefore, contrary to the *DNB*'s policies, such as the collection of the greatest possible amount of facts, the separation of the public and private spheres, and the avoidance of moral judgements. These characteristics of the article on Mary Kingsley illustrate that the *DNB*'s content is also constrained by Victorian gender ideology.